

かゑらじと かねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第110号

令和2年5月12日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

得宗被官・駿河出身説の前提崩れる

太子町大字山田に、小字「楠木」の地名

＝ 楠正成の出自をめぐる新発見！ ＝

● 「日本歴史」3月号今井論文 ●

楠氏については、残る史料から史学的に解明されていることは数少ない。私たちも正行研究を進めるにあたって、残る数少ない史料（自筆の国宣や書状等）を足掛かりに、太平記を中心とする文献や軍忠状、そしてゆかりの地に残る伝承や口伝、史跡などを繙きながら、さらに楠氏を取り巻く歴史上の人物等にも梓を広げて正行の人物像を少しずつあぶりだしてきた。その積み重ねの一部がこの楠正行通信でもある。

そして、何よりも、楠氏の出自がはっきりしていない。

扇谷は、河内に楠の地名が残っていないことから、駿河国楠木村の存在を根拠に得宗被官説・駿河出身説が定説となっていると紹介してきた。

しかし、会員の西村さんから驚く論文（コピー）が届けられた。

日本歴史学会編集「日本歴史」2020年3月号所収、主題『太平記秘伝理尽鈔』と「史料」、副題「楠木正成の出自をめぐる」と題する今井正之助論文（A論文）である。

この論文の結論を申し上げますと、楠氏の出自を東国に求める説の大前提として、河内国内に「楠木」の地名が見当たらないということであったが、堀内和明氏が正成の根拠地近辺に「楠木」の小字がある、と指摘したと問題提起をしたことである。

西村さんは、「大変文章が難しく、正直、よく知りませんでした。NHK 放映の「ヒストリア」でも、駿河出身説が取り上げられていましたが、この論文によると、それも疑問だということらしいです。」と感想を寄せている。

そこで、今井論文を中心に、改めて楠氏の出自につい

て考察をまとめる。

● 楠木の根は鎌倉、と謳う和歌 ●

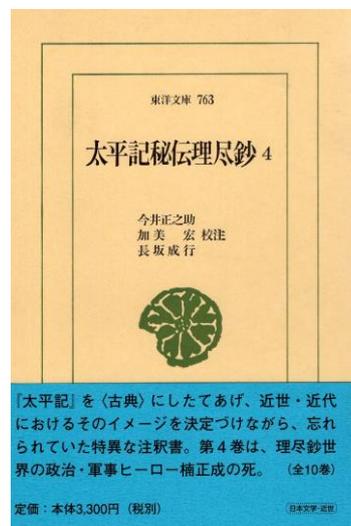
今井正之助は、東洋文庫「太平記秘伝理尽鈔4」の巻末、解説「正成討ち死にをめぐる諸説と正成の出自」の中で、楠氏の出自について、大要以下、記述している。

正成御家人説は、三浦周行「楠木正成」（「歴史と人物」東亜堂書房、1916年）、植村清二「楠木正成」（「至文堂」、1962年）などが触れ、その後網野義彦によって繰り返し提唱され、網野義彦は御家人説にとどまらず得宗被官であった可能性に歩を進めた。

さらに近年、笈雅博は、武蔵国御家人をその祖と

推定する網野説に対し、出身の地を駿河入江庄の一部、楠木村と比定し、注目を集めている。しかし、駿河出身説は、得能弘一「楠木正成の出自に関する一考察」（「神道学」1986年）が創見である。

武蔵、駿河いずれにせよ、これら諸説の背景には、河内に「楠木」という名字の地が見つかっていないこと、そして「楠木の根は鎌倉にある」という「道平公記」の和歌の存在が御家人（さらには得宗被官）説を補強している。



「太平記」を〈古典〉にしたてあげ、近世・近代におけるそのイメージを決定づけながら、忘れられていた特異な注釈書。第4巻は、理尽鈔世界の政治・軍事ヒーロー楠正成の死。（全10巻）

● 注目を集める得宗被官説 ●

この解説を補完するものがA論文で、その大要を以下まとめてみよう。

楠木正成の出自については、近年最も注目を集めているのが得宗被官説で、中でも寛雅博の所説を支持する論が多い。

寛論文は、①得宗家の支配の及ぶ駿河の国入江庄楠木村に注目し、この荘園中に「楠木」を名字とする得宗被官の存在を想定、②楠木正成の根拠地、河内の國観心寺は安達氏族滅後、得宗領となり、楠木氏が地頭代として送り込まれたと想定、③この2点を裏付ける史料（楠木氏は外部から移ってきた）として、道平公記の和歌「くすの木のおねはかまくらに成るものを 枝を切ると何の出るらん」（楠氏の出身は鎌倉＝東国の得宗家にあるのに、枝（正成）を切りになぜ出かけるのか、の意）を挙げる、というもの。

今井論文は、正成御家人説・駿河出身説のより本質的な問題として、河内国内に「楠木」の地名が見当たらないということがあった、という。

● 「楠木」小字地に石切場跡 ●

しかし、堀内和明が正成の根拠地近辺に「楠木」の小字がある、と指摘したというのである。

すなわち、堀内は、「楠木一族の名字をめぐる」（2002年）論文の中で、①石川郡東条の北端に位置する太子町の大字太子（山田が正しい：今井指摘）に「楠木」の小字があること、②この地に中世石切り場跡が存在することが近年、大阪の考古学者によって確認された、という。

堀内は、以上2点を紹介し、この楠木石切り場こそ楠木一族の生産・流通活動や領域支配にかかわる拠点であり、その歴史的な営みの中で小字「楠木」が地域に定着、辰砂・金剛砂とともに楠木一族と鉱物資源との関係に新たな材料を提供したことになろう、と主張。

今井論文は、この「楠木」の地は二上山西麓の谷あいの地であり、中世以前から続く地名かどうかの検討が必要と思うがと断った上で、楠氏の根拠地周辺に、ないとされていた地名が出現した、と得宗被官説の当否に直結する重要な論点が生まれたと締めくくっている。

● 「楠木」小字地は約3反の谷 ●

この地名については、奈良文化財研究所が公開してい

る「全国遺跡報告総覧」に、「楠木石切場跡」として、以下の通り記載されている。

■奈良文化財研究所「全国遺跡報告総覧」掲載

遺跡名	楠木石切場跡
所在地	南河内郡太子町大字太子小字楠木 (大字太子は、大字山田の誤り:今井指摘)
調査	1997年4月1日～1997年12月31日
調査原因	南阪奈道路建設に伴う事前の埋蔵文化財調査
主な遺構	採石遺構、土坑、鍛冶炉

扇谷が、この「楠木」の小字について、太子町生涯学習課に問い合わせたところ、文化財担当者の方から、次の通り、楠氏かかわりの2つの小字があると回答を得た。

*「楠木」の小字

小字の地は、谷の奥、約3反ほどの広さの長い谷一帯

*「梨堂」の小字

ナシンド。楠氏（ナンシ）から転じたものではないかとの伝承がある

● 小字名から楠木を名乗ったか ●

以上、今井論文を見てきたが、太子町に「楠木」の小字が発見されたことは、楠氏の出自を考えるうえで、大きな一石を投じることになると思われる。

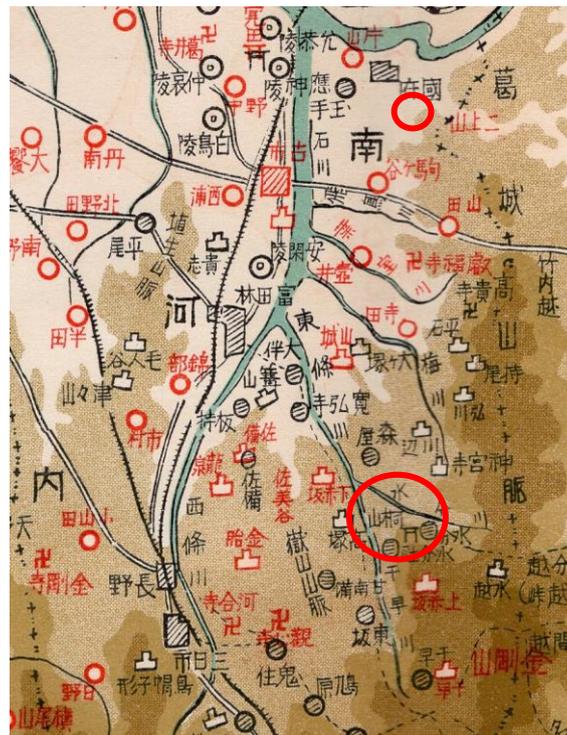
少なくとも、今井論文が指摘するように、得宗被官説や駿河出身説の大前提が崩れることはもとより、出自の議論がさらに混迷を深めることになるだろう。

扇谷は、小字楠木の地が、楠氏が本貫としたといわれる千早赤阪・東条からほぼ数キロ北方に位置すること、楠一族が扱ったとされる辰砂・金剛砂等のかかわりを連想させる石切場であったこと、この点から推量して、この小字名から楠を名乗ったとの仮説は十分に成り立つと思う。

今井論文は、「議論の深化を期待したい」と締めくくっている。

あまりにも謎の多い楠氏だが、西村さんは「謎の多いところも楠氏の魅力の一つですよ。楠氏のことで活発な議論があるのは嬉しいです。」と、お便りに書かれている。

ここで結論を申し上げることはできないが、少なくとも、定説として紹介してきた得宗被官説・武蔵国御家人説・駿河出身説を良しとすることは困難になったようである。（地図／藤田精一「楠史研究」より転載 大きい円:千早赤阪楠氏本貫地 小さい円:「楠木」小字石切場跡）



ここで結論を申し上げることはできないが、少なくとも、定説として紹介してきた得宗被官説・武蔵国御家人説・駿河出身説を良しとすることは困難になったようである。（地図／藤田精一「楠史研究」より転載 大きい円:千早赤阪楠氏本貫地 小さい円:「楠木」小字石切場跡）

(文責『四條畷楠正行の会』代表 扇谷昭)